



あなたへの手渡し

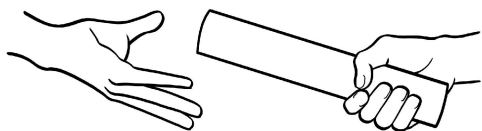


浄土真宗の開祖・親鸞聖人に関係する書物で、最も知られているのは、『歎異抄(たんにしょう)』でしょう。しかし、この書物は聖人自身の著作ではありません。唯円という弟子が、聖人の没後およそ30年ほど経ってから著したものです。

そこには、親鸞聖人から直接聞いた印象的なことば(「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」)などが数多く記されており、浄土真宗以外の方々にも広く読まれています。

最近、作家の高橋源一郎さんが、この『歎異抄』を現代語訳されました。なかでも第10条(親鸞聖人直接の言葉を記す最後の章)では、本文にはない、弟子・唯円の思いを大胆に付け加えて翻訳されています。

ぼく(唯円)がこんなに長生きしたのは、そのためだったのだ...



「あの方(親鸞聖人)」がぼくに向かって話されたのは、そのことを知ってほしかったからじゃないだろうか。自分のことばをきちんと伝える誰かが必要だということを、「あの方」は知っていたのだ。だから、ぼくに向かって話すとき、「あの方」はいつもぼくの目を真っ直ぐ見つめていた。あれは、ぼくの間を見ていたんじゃない。ぼくの向こうに、ぼくを通して、たくさんの、「あの方」のことばを待っている人たちを見ていたのだ。

だから、ぼくはこの本を書いた。「あの方」の考えを歪めることなく伝えるために、「あの方」のことばを真っ直ぐにあなたたちに手渡すために。

『一億三千万人のための歎異抄』 高橋源一郎 著 より

高橋さんいわく、「唯円その人になったつもりで、『歎異抄』の翻訳に取り組んだ」ということなので、唯円の思いを表白する場が必要だったのかもしれませんが。

そこには「親鸞聖人から聞いた教えが、ゆがめられている異を嘆く」という、本のタイトル通りの唯円の思いに加えて、高橋さん自身の問題意識、「**ひとりからひとりへと届けられるからこそ、宗教や信仰の意味があるのではないか**」という思いも、投影されているように感じます。

考えてみると、**ものごとを「正しく伝えていく」には、「私からあなたに、間違いなく手渡すこと」を繰り返していくしかない**のかもしれませんが。そして時代を超え、場所を超えた無数の「手渡し」によって今、私のもとにお念仏が届いているのです。その「手渡し」には、先にお浄土に往かれた、「私」の大切な方々も加わっています。では皆さんは、どの「あなた」に向かって、大切なことを手渡しますか？

